

## 「遺墨」資料の調査報告

廣池千九郎研究室  
研究員 矢野篤

昨年度は廣池千九郎関係資料（以下、関係資料）全体の由来と構造を明らかにしてきたが、今年度から資料の各論に入る。今回はその中で「遺墨」を取り上げた。関係資料は記録史料、図書資料、モノ資料の 3 つに大別できるが、遺墨はその中で、記録史料に分類される。

遺墨は廣池直筆の書とその他の人物が揮毫した書の 2 種類あり、前者は現在 255 点が確認されている（他に数点の未登録資料あり）。後者は廣池が直接貰ったもの、間接的に手に入れたもの、廣池没後に法人として購入したり寄贈を受けたりしたもので、点数は 88 点である。主な人物として、孔徳成 24 点、廣池千英 14 点、釈雲照 11 点、小川含章 4 点、富岡鉄斎、井上頼国等があげられる。

廣池直筆の書の形態は、掛軸 164 点、額装 45 点、掲板（扁額）33 点、卷子 5 点、扇子 3 点、マクリ 5 点である。

また今回、書の内容を調べたところ、廣池オリジナルが 108 点、中国古典 69 点、御神号 29 点、天理教 16 点、和歌 13 点、日本古典 9 点、仏教 3 点、西洋の古典 2 点、その他 6 点であった。「誠」などの一般的な語であっても、廣池独自の解釈があると思われるものは、オリジナルに分類した。

遺墨は基本的に廣池千九郎記念館本館（柏）の収蔵庫に保管されているが、各分館（中津、畑毛、谷川・大穴）にも展示、保管されている。また全国各地のモラロジー事務所、協議会、維持員宅や同じく全国各地の天理教教会や信徒宅においても所蔵されている。これらは廣池が生前、モラロジーの会員や天理教の教会及び信者に寄贈したものである。

遺墨資料の目録（台帳）には、『廣池博士遺墨台帳』No. 1～No. 4、『会員所蔵遺墨台帳』No. 1～No. 7、『会員外所蔵遺墨台帳』No. 1 がある。これらの目録は作成年代が不明で、いくつかの課題がある。例えば、資料の写真が白黒で、細部が不鮮明、表装された遺稿や書簡などの遺墨でないものまで含まれている、未整理資料が記載されていない、などである。現在、新しい資料目録を作成しており、それには国際標準の記述項目を取り入れている。

保存に関しても課題がある。主に大正時代から戦前にかけて作成された資料なので、劣化が進み、汚れ、しみ、しわのあるものが多い。専門業者にクリーニング・表装の直しを頼むと、1 点につき数万から数十万かかる。そのため、自前で最低限の保存措置や修復をできるような体制をつくる必要がある。

最後に、廣池はどのような目的で書を書いたのか。廣池が本格的に揮毫を始めたのは、天理教入信以降である。各地の教会や信者に寄贈していることから、当初は天理教における布教ツールとして書を書いたと思われる。それを踏襲して、モラロジーの普及を進めるなかでは、開発ツールとしての役割が与えられたといえる。昭和 10 年の道德科学専攻塾においては、各施設に掲板（扁額）を掲げ、モラロジー教育の理念を塾生たちに伝える重要なツールとなった。